

特集

内子座の明日

9月から保存修理工事に入る内子座。工事が始まればおよそ4年間は休館します。町民によって建てられ、使い続けられてきたまちのシンボル。舞台はしばらく見られなくなりますが、皆さんにとってその存在を見つめ直す機会にもなっているようです。

今回の特集では、まちの皆さんの内子座への思いを集めました。内子座を未来につなぐ意義を一緒に考えます。





写真家 浅田 政志さん

写真というカタチで残す
内子座の魅力と人の思い

内子の皆さんとの撮影会はとても楽しかったです。一緒に話しながらポーズを決めたり、アイデアを出し合ったりと、みんなで作り上げたことで、想像以上にすてきな写真になりました。

撮影で感じたのは、皆さんの内子座への熱量です。この場所が生きがいや喜びにつながっていることが伝わってきました。内子座が今も輝いて見えるのは、関わる人たちが生き生きと活動しているからだと思います。写真でカタチに残すことで、内子座への思いや愛情も思い出として残っていくことを願っています。写真展では作品を楽しんでもらいながら、改修後の内子座の未来にも思いをはせてもらえとうれしいです。内子の皆さん、ぜひ足を運んでみてください。



▶撮影会前日が誕生日だった浅田さんをサプライズの花吹雪でお祝い。内子座でのとっておきの思い出になったそう

浅田 政志さん — profile —

写真家。1979年三重県生まれ。日本写真映像専門学校研究科を卒業後、スタジオアシスタントを経て独立。第34回木村伊兵衛写真賞の受賞をはじめ、三重県立美術館での個展開催や、2023年度後期放送のNHK連続テレビ小説『ブギウギ』でメインビジュアルの撮影を担当するなど活躍している。

7月7日に行われた内子座記念撮影会の一場面



1_どんなポーズにするかみんなで相談 2_内子座ならではの「せり」も活用 3_パソコンのモニターで、撮影した写真を楽しそうに確認する「内子子ども狂言くらぶ」の子どもたち 4_準備を手伝うスタッフの皆さん



大正5年、内子座のこけら落とし。祝いの餅まきに大勢の人が集まった

町民に愛される 生きた芝居小屋

内子座が私たちの町に誕生して108年、今まで内子座がどんなふうに残ってきたのか、歴史を振り返りたいと思います。休館中も楽しい企画も開催します。その第1弾として行う「内子座記念撮影会」。撮影を担当した写真家・浅田政志^{まさし}さんに話を聞きました。

内子座が誕生したのは大正5年（1916年）、大正天皇の即位を祝い創建されました。地元の有力者や商店主たち17人が発起人となり、大正4年に建設に着手。7000円の資金をかけて翌5年2月21日に落成し、人形浄瑠璃の淡路・吉田傳次郎^{でんじろう}を迎えてこけら落としが行われました。昭和初期まで内子座は、歌舞伎や文楽、活動写真などさまざまな興行が行われ、たくさんの人たちを楽しませてきました。しかし時代の変遷とともに映画の人氣が高まり、昭和25年（1950年）頃、内

部を映画館の仕様に一部改造。昭和42年（1967年）には内山商工会に売却されました。昭和50年頃には老朽化により取り壊しの声もありましたが、昭和60年（1985年）に復原し、往時の輝きを取り戻しました。劇場として必要な備品は、町の人々からの寄付・約800万円で整備。それ以来、数々の公演や活動が行われています。内子座は町の人たちに今も愛され続ける芝居小屋です。

地盤調査を終えて—— 保存修理の内容

令和2年度から3年かけて行った工事では、地盤調査な

保存修理中も楽しめる 企画を開催

保存修理期間中は内子座を休館します。シートで覆われて見えなくなりますが、工事の進捗と合わせて見学会を企画しています。普段は入れない楽屋を10月5日から公開し、内子座や保存修理の内容について情報発信していく予定です。その第一弾として、浅田政志さんが撮影した「内子座記念撮影会」の企画展を開催します。詳しくは決まり次第、広報紙などお知らせします。



2年度から行った調査工事

1_内子座の内部に足場をかけて、調査工事 2_地盤調査 3_外部の足場設置

内子座と縁のある皆さんに思い出を聞いてみると、内子座という箱の中には、いろいろな思いがたくさん詰まっていることが分かりました。あなたの内子座での思い出は何ですか？

結婚式を終えた後、地元の写真館で夫の浅吉さんと写った一枚



大原 キシカさん (98) =内子1=



令和のこけら落としを楽しみに――

内子座の前で叔母が開業した美容室に勤めるため、18歳の頃に来てから81年が経ちます。22歳の頃には内子座で初めての結婚式を挙げました。お色直しに、店との間を行き来したのを覚えています。昔は俳優さんたちも内子座の表から出入りしていて、仕事をしながら、窓ガラス越しによく眺めてました。昭和のスター「寅さん」が来たこともあり、「いい所に住んでるね」と言われました。本当にそう、内子座があるおかげで、たくさんの人との縁が生まれました。声をかけてもらうのでありがたいです。令和のこけら落としをみんなでお祝いしたいから、まだまだ元気に頑張りたいです。

おもてなしの心で観光客の思い出を増やしたい

昔は内子座で公演がある日、地域の人に開演を知らせる「ふれ太鼓」が鳴っていました。音が聞こえてくると、みんながワクワクしたものです。私も一度だけ太鼓櫓でたたいた思い出があります。普段は内子本町商店街で商売をしていて、内子に来てくれたお客さんを「おもてなし」したいという気持ちが強いです。六日市自治会長だった8年前には、たくさん訪れる観光客を気持ちよく出迎えてあげたいと、内子座前の小広場をきれいにする活動を始めました。今では内子座の職員や近所の人たちも手伝ってくれるようになり、内子座を応援してくれるサポーターが増えたようでうれしいです。



小広場をきれいにし始めた頃の写真。季節ごとに花を植えたり、草刈りをしたりして手入れしている

宮瀬 盛治さん (78) =内子4=

みんなの笑顔と幸せな記憶が残る場所

夫の地元、内子町で暮らし始めて3年目。今年2月に内子座で結婚式を挙げました。お世話になっているまちの人たちに感謝の気持ちを伝えたいと、まちのシンボルであり、誰でも気軽に入館できる内子座を会場に選びました。当日はたくさんの笑顔に囲まれて人生の節目を祝福してもらい、愛されていることを実感――。忘れられない一生の思い出になりました。実家の広島から来てくれた家族や友人たちは、「地域の皆さんに大事にされていることが伝わる、心温まる式だった」と喜んでくれました。内子座を訪れるたびに、結婚式の温かな記憶を思い出ずと思います。



当日は約130人が駆けつけてくれた

水本 誠時さん (30)、美咲さん (29) =小田下=

みんなの内子座での思い出

内子座の舞台に立てる喜び

夏祭りで先輩の演奏を見たことがきっかけで、内子高校郷土芸能部に入部しました。卒業後は和太鼓集団「和達」の一員として、演奏を続けています。いろいろな場所で公演しますが、内子座は特別。歴史ある木造の舞台、近くで見えるお客さんの表情に、いつも以上に気持ちが入ります。特に思い出に残っているのは、高校時代の定期演奏会です。年に一度の晴れ舞台で、フィナーレに紙吹雪が舞う光景は忘れられません。今日の内子座があるのは、ここを大事にする人たちの思いがつながってきたからだと思います。私も、その一人としてこの舞台に立てることをうれしく、誇りに思います。



内子座の舞台に立つ白尾さん

白尾 歩実さん (32) =田中=



少彦命を演じた当時3年生の多比良さん。今は扇子を使った舞に挑戦中

多比良 佳希さん (内子小5年)

内子座は思い出いっぱいの宝箱

2年生の頃から「内子こども狂言くらぶ」に所属しています。内子座での一番の思い出は「少彦命」という神様の役を演じたこと。初めての大役で見せ場も多く、本番はドキドキしました。失敗もあったけれど、狂言の動きとせりふでお客さんを笑わせることができ、とてもうれしかったです。稽古がある日も楽しみで、休憩時間には友達と宿題をしたり、遊んだり――。私にとって内子座は日常にあるのが当たり前で、思い出がいっぱいあります。長い間、閉館するのは寂しいです。また内子座の舞台に立つ日が来たとき、主役を任されるくらい成長できるよう、腕を磨き続けたいです。

仲間と夢中で過ごした青春が詰まっている

昭和62年から平成21年まで活動した「内子座社中ふれだいこ」の一員です。公演の企画運営を自分たちですることこにこだわり、私はポスターを手掛けていました。手漉き和紙と版画で制作し、印刷は松乃屋旅館の宴会場でメンバー総出でしていました。広報活動やチケット販売などを本業の合間にするのは大変でした。電話帳のA行から順番に電話したり、赤字のときは自分たちで補填したりと苦労も多かったです。でも観客の喜ぶ姿や役者との交流など、苦労を超える面白さや達成感がありました。夢中になれること、それを一緒に楽しめる仲間に出会ってくれた内子座には、僕の青春が詰まっています。



山田 きよさん (65) =柿原=

印刷風景。毎回200枚ほど制作し、夜中まで作業する日もあった。山田さん(右)



取材では、内子座の思い出を楽しそうに話してくれる皆さんの表情が印象に残りました。ただ建物だけを残すだけでなく、内子座への思い出や愛情もつないでいくことがまちの未来につながっていくのだと思います。

たくさんの思い出の詰まった内子座をいつまでも大切にしていきたい——



内子座が私たちにくれるもの

内子座を未来につなぐことは、町にとって、町民にとってどんな価値があるのでしょうか——。長くこの芝居小屋に関り続ける3人の話からは、地域を思う気持ちを内子座が育んでくれていることが伝わってきます。

内子まちづくり商店街協同組合
代表理事 大西 啓介さん（51）



賑わいだけでなく
地域への誇りや愛着も増す

地域の若い子や移住してくれた人と話していたら、内子座や八日市・護国の町並みなど、古いものを大切に残している町は格好いいという声を聞きます。町並み保存地区ではここ数年で、新しい店が増えました。商店街でも出店したいという問い合わせもあり、新しい風が入りつつあります。息子も家業を継ぐと言ってきて、頼もしいです。まちに賑わいを生むには、観光や公演で内子座へ来てくれたお客さんが、商店街や町並みにも足を運んでもらうのが理想。地酒や郷土料理、伝統文化など、内子の魅力に触れて、楽しい思い出をたくさんつくってもらいたいです。その思い出がまちへの愛着につながり、さらに人を呼び込む力になると思います。内子座が休館しても、商店街と町並みが一体となって、地域の皆さんや観光で来たお客さんに楽しんでもらえる仕組みをつくりたいです。

内子こども狂言くらぶ
城戸 景道さん（17）



内子座で今度は僕が
子どもたちに狂言を教えたい

小学3年の頃から10年間、狂言を続けています。最初はなかなかせりふを覚えられず、練習で泣いたことも——。でも諦めずに頑張って初めて立った内子座の舞台で、お客さんに笑顔と拍手をもらった時は、今までにない達成感がありました。それからどんどん狂言にのめり込み、何事も努力するようになったのは、あの初舞台があったおかげです。稽古では毎月、狂言師の茂山千三郎先生が内子座に教えに来てくれます。それに僕たちの舞台のために大勢の大人たちが支えてくれる、本当に恵まれた環境です。子どもの頃からこんな経験ができるまちは他にないと思います。将来は僕も狂言を支える側になって、恩返しできればと思います。進学で一度は内子町を離れると思いますが、きっとまた戻ってきます。子どもたちのために内子座と狂言が、ずっと続いてほしいです。

劇団オーガンス代表
徳田 幸治さん（54）



「芸に遊ぶ」のワクワク感が
まちの力に——

劇団オーガンスは今年の11月で30周年を迎えます。ずっと内子座を拠点に公演を続けてきました。内子座の良さは、お客さんの反応を近くで感じられることです。使われることで輝く内子座。私たち以外にも多くの人々が舞台を楽しんでいます。公演などの文化的な活動があることで、まちの人たちの心が豊かになり、「内子座がある」こと自体が自慢になると思います。休館のため断念した30周年記念公演を、新しくなった内子座で開催するのが今の目標。この期間に共生館やスバルなどで活動が続け、オーガンスの知名度を高めることが、後々の内子座ファンの獲得につながればと期待しています。役者と観客が一体となる舞台は、一期一会。そのワクワク感を30年間楽しんできました。舞台後、「よかったね」と喜び合える、ちょっとしたことの継続ですが、それが私たちや町の力につながっていると思います。